

安全運転管理者は地域の交通安全を守る先兵、 わが故郷大洲を知ってほしい

愛媛県大洲市 愛媛舗道株式会社社長
小林 哲之

龍馬と関係深い 幕末期の大洲藩

私は大洲市で生まれ育ち、4年間の学生生活を東京で過ごしたあとは故郷へ帰って今日までこの地で生きてきた。40歳になる直前から大洲警察署管内の安全運転管理者協議会の会長になったのも、自分らのように地元の事業所で働く者たちが会社を守ると同時に、地域の交通安全を推し進める先兵となるべきだと考えたからである。

昭和56年から協議会の会長を委嘱された私は、日々アイデアを練って会員の意見を取り入れながら次々にアイデアを実行に移したのだった。それらの活動の具体的な事例はあとで詳しく述べることにして、今回は活動の場であり舞台であつ

た地元大洲について説明させていただきたいと思う。

伊予の国、松山と宇和島の中間に位置する南予地方の大洲盆地は古くから開けていたところで、江戸時代に入ると間もなく藤堂氏、脇坂氏の後を受けて伯耆米子藩から加藤氏が転封され、以後明治に至るまでその治世が続いたのだった。

幕末において、かの有名な坂本龍馬が土佐脱藩のとき、長州に行く道として勤皇派の大洲藩内を選んでいる。その後、龍馬率いる海援隊は大洲藩所有の160トンの蒸気船「いろは丸」を借り受けて、明治維新に向かっての活躍に大いに貢献した史実も明らかになっている。またアメリカ国防総省のペンタゴンに酷似した北海道函館の五稜郭を設計・建設した武田斐三郎（成章）も大洲藩士であ

る。

小京都などとも呼ばれる大洲の市中を愛媛県内で最も大きな河川である肱川（ひじかわ）が貫流しているのが風景のポイントだろう。

夏場には岐阜の長良川とならんで「日本3大鵜飼」のひとつといわれるようになった鵜飼が催され、その川面には平成15年に木造で復元された城の天守閣が影を落とす。多くの支流を集めながらその90%は山間地を流れている肱川だが、市内のお城に近いところでは川幅が広がり流れもゆるやかになっていて、大曲りの部分には平坦な河原が広々と開けている。

秋の夕べになるとその河原にたくさんの人が集まってきて「いもたき」という一種の宴（うたげ）を繰り広げる。

名月を見上げつつ 河原に集う人びと

収穫したばかりのとろけるような里芋とその他の野菜や鶏肉が主役の鍋料理がガスコンロの上で湯気を立て、やがて月

が昇って木々に囲まれた高台の城を照らす。城はライトアップされるのだが、月とともに浮かぶ天守閣の姿は一段と趣を深くするのである。大洲の「いもたき」は東北地方で盛んな「芋煮会」と似ているかもしれないが、どちらかという団体を取り仕切るようなイベント風のものではなく、河原に敷いた藁蓆の上に行儀よく座って秋の味を楽しみながら親睦を深める会のように思われる。静かに流れる豊かな水辺にあつて、人々は大きな夜空に包まれながら秋の夜のひとときを和やかに過ごすのである。

大洲は水郷ともいわれ、古くから水運をはじめとして川の恵みを受けてきた土地である。そのように、ふだんはやさしく穏やかな肱川であるが、たびたび暴れては激甚災害をもたらす川でもあるのだ。この川の特徴のひとつは、水源地から河口までの直線距離がわずかに18キロメートルと短いにもかかわらず、流路の全長は105キロメートルに及ぶという点である。その名の由来という肱のよう

な曲がったところが多いので流路が長くなるのだろう。しかも流路の90%が峻険な山地を流れ、残り10%が高低差のない平坦なところを流れているのである。その10%が大洲の市街地、つまり盆地となつたところなのだ。

2歳を前に命拾い 濁流渡る母の冒険

そのために、大雨で極端に水量が増えると盆地全体が洪水に見舞われることになる。この数十年間でも多くの災害記録があるし、平成になってからも2件の大水害が出ている。

私が命拾いしたのは、昭和18年の大水だった。まだ2歳になる前の赤ん坊の頃である。その年の水害は、特に記録的な被害で全国に知られたものだったらしい。

自宅2階屋根まで浸水したとき、祖母と母も、これ以上増水すると危険だというので、濁流のうえにかけた梯子を伝って8棟（100m）離れた3階建ての旅館に避難したということだ。母も私と同じで小柄なほうであり女性としても非力だったろうが、赤ん坊の私を背負ってよくもまあ奔流に呑みこまれず助かったものだと思っている。命がけでわが子を守るうとする母性、その無償の愛には今も素直に頭が下がる。

それにしても、自然がひとたび暴れ出すと人知の及ばぬ力で人間が築いたものを破壊する。くれぐれも自然の力を軽視してはならないと思うのである。

（続く）

絵・市川興一



小林哲之（こばやし さとし）さんのプロフィール

1942年（昭和17年）愛媛県大洲市生まれ。愛媛舗道株式会社社長。大洲高校から麻布獣医科大学（現・麻布大学）に進み65年卒業と同時に父君が創業し経営する愛媛舗道社に入社、83年社長となり今日に至る。早くから交通安全の重要性に目を向け81年大洲安全運転管理者協議会会長に就任（在任25年）、89年愛媛県安全運転管理者連絡協議会副会長（同12年）、2001年より会長（同5年）をつとめ、愛媛県高速道路交通安全協会副会長（同5年）なども歴任した。事業所の運転管理を中心に地域社会における安全活動の推進力となつて強いリーダーシップを発揮し、その功勞により2005年春の第45回交通安全国民運動中央大会においては全国優良安全運転管理者協議会の代表として表彰を受けた。